

平成26年度

埋蔵文化財調査士補


資格試験 筆記問題答案用紙 (Ⅱ小論文)

受験番号	氏名	Ⅱ
B-		

試験日：平成26年8月23日(土)

東京会場：東京御茶ノ水「連合会館」

大阪会場：大阪「大阪ガーデンパレス」

公益社団法人
 日本文化財保護協会

【Ⅱ】 次の設問から2問を選び、400字以内で述べなさい。(横書きで記述すること)

問1 分布調査の結果をGIS(地図情報システム)に移行するメリットを述べなさい。

【解答例】

論文中に次のようなキーワードが記述されていること

- ① 開発事業に対する問い合わせに対し、迅速な対応を図ることができる。
- ② 遺跡が持っている遺跡情報や、発掘調査歴・試掘調査歴・文化財保護法上の書類歴・開発業者との協議歴・報告書のPDF等をデータベース化することで、地図情報とあわせた一体管理が可能となる。
- ③ 特定時期の遺跡の広がりや、特定遺物の分布状態の把握など、時間軸・空間軸での検索が可能となり、学習的な利用が考えられる。
- ④ 地図の中に写真情報等を埋め込むことで、視覚的な効果があがり、観光的な観点からの利用も考えられる。

100 (字)

200

300

400

問2 遺物実測について、実測道具の変遷から見た実測方法の変化について述べ、
実測に必要な技能について記述しなさい。

【解答例】

明治期に刊行された大森貝塚の報告書で、定規やコンパスを駆使したモースによる写実的な実測図が提示されて、縮尺が明記された計測に基づく実測図が日本で初めて現れた。その後はモースの実測方法は踏襲されず、正確な実測図の登場は大正末から昭和初期を待つことになる。昭和に入って京都大学の小林行雄氏がマコ（形取器）を使い始めたといわれ、土器の大きさや形が比較できる実測図が短時間に作成できる道具として、考古学者必携の道具となっていく。昭和も終わりの頃に、望遠レンズを使った長焦点撮影による実測用写真撮影や、ロボットアーム式や磁界式の3次元測定器が登場し、正射投影図を簡便に作成する装置が生まれてくる。平成に入って、テレビモニタ上で図化するドラフティングシステムや、デジタルカメラを使用した図化機や3次元レーザ計測装置などが登場してきた。実測する技術が変遷しても、考古学における遺物を観察する力が実測の大前提であり、対象物に表れる情報を読み、情報を整理して描画できる技能を高めることが重要である。

100 (字)

200

300

400

問3 低湿地遺跡から発見された木製品の保存処理方法について述べなさい。

【解答例】

論文中に下記のキーワードが記述されていること

「木材含水率」、「乾燥・収縮」、「防腐剤」、「水浸木材」、
「含浸強化剤」

100 (字)

200

300

400